

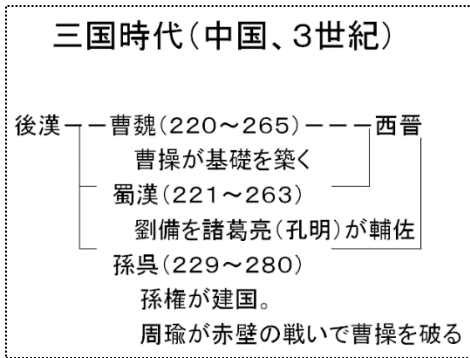
# 三国志の教訓 一強多弱の対抗軸

早稲田大学文学学術院  
教授 渡邊 義浩

## はじめに

### 1) 三国志の時代

三国時代はいつ頃か、漢と言う国家があった漢民族とか漢字の漢のときです。前漢、後漢およそ 400 年間続きましたが、この漢の支配のあり方に限界が訪れ、その中で漢を変えて行こうとしたのが曹操です。子息の曹丕が初代皇帝として建国しましたが、曹操が建てた魏であるとして「曹魏」と言われます。それに対して漢を継承して行くと唱えたのが漢一族の劉備です。諸葛亮、日本では諸葛孔明と



呼ぶ事が多いのですが、その諸葛亮が助けていた国が、蜀又は蜀漢という国です。もう一つ孫権が建てた呉と言う国があって、三国時代で一番有名な「赤壁の戦い」で曹操を破ったのが孫権に仕えていた周瑜です。

三国すべてが何処かを統一する形ではなく、魏が蜀を滅ぼし魏は西晋に滅ぼされて、西晋が呉を征服する事によって取り敢えずは中国を統一するのですが、300 年から起こった内乱とその後異民族が侵入して来てこの国家は滅んでしまいます。その後隋、唐と言う帝国が 6 世紀に出来るまで、隋が

中国を統一するのが 589 年ですから、それまで 370 年渡って分裂が続いて行く時代となります。隋、唐帝国の統一の基盤を作ったのが曹操です。魏が黄河の北の流域を支配し、長江の流域に呉、蜀、地図で見ると中国が 3 分されて見えますが、人が住んでいない地域が領土に含まれてり、当時の力関係を見ると魏が 9、蜀が 1、呉が 3、程度です。

### 2) 二つの三国志

本日の講義のサブタイトル一強多弱の対抗軸で言いますと、魏が一強となります。日本では 2 つの三国志が伝わっています、一つは羅貫中がまとめたと言われる『三国志演義』で歴史小説です。かなりのフィクションを加えているものです。もう一つ正史、歴史書としての『三国志』で陳寿が、書いたのですが、陳寿は西晋の歴史家です。三国時代が終わって書かれたので、正しいのだとは言えません。

西晋が正統を継いでいるのは魏と言う国家です。だから魏を中心として書かなければなりません。また陳寿は蜀で生まれているので、蜀、諸葛亮も良く書きたい。「死せる孔明生ける仲達を走らす」で有名な司馬懿（仲達）は西晋を建てた司馬炎の祖父です、従って司馬懿が戦った諸葛亮は実際よりも良く書かれる事になるでしょうし、司馬懿のもう一つの功績、遼東半島の公孫氏を滅ぼした事で、卑弥呼の使者が遼東の公孫氏までの朝貢であったが、司馬懿が公孫氏を滅ぼした事により、洛陽まで朝貢する事が出来るようになりました。陳寿はその事を司馬懿の功績として捉え、呉の彼方の海の先にある大国から朝貢されるようになったとして、三国志の中に魏志倭人伝として倭国の事を書きました。正式には三国志の武帝紀第一の 30 に東夷伝、鮮卑、扶余等の異民族の記録があり、その中の一部ですが倭国の事が書かれているそれを魏志倭人伝と呼んでいます。37 万字書かれている陳寿の三国志の 0.5%に過ぎない物です。陳寿の三国志も全部が正しい訳ではない政治的な偏向や世界観などが関係して書かれたものです。

## 1. 曹操の革新性

### 1) 「一強」袁紹

曹操が出て来た時の一強は袁紹です、その時曹操は袁紹にどう対抗したのか、曹操の革新性で白馬、官渡の戦いをどう戦ったのか、この戦いが一強に対する一つ目の戦い。曹操が袁紹を打倒した後、一

強になった曹操にどう対抗して行ったのか、呉をつくった孫権と蜀をつくる劉備が連合して赤壁の戦いで曹操を破って行くこの戦いが一強に対する二つ目の戦いです。

袁紹の家は四世三公と言われ四世代に渡って三公と言われる大尉、司空、司徒（一人に権力が集中しない様に皇帝に集まる仕組みでのほぼ同格の官職）を5名も輩出した圧倒的な名門の家柄です。門生・故史と云う言い方をしますが、門生と言う儒教を袁紹の家で学んだ弟子達、故史と言いますが袁紹が抜擢した人達これら門生・故史と言う袁紹の味方をする人が天下に「あまねし」と言われた。

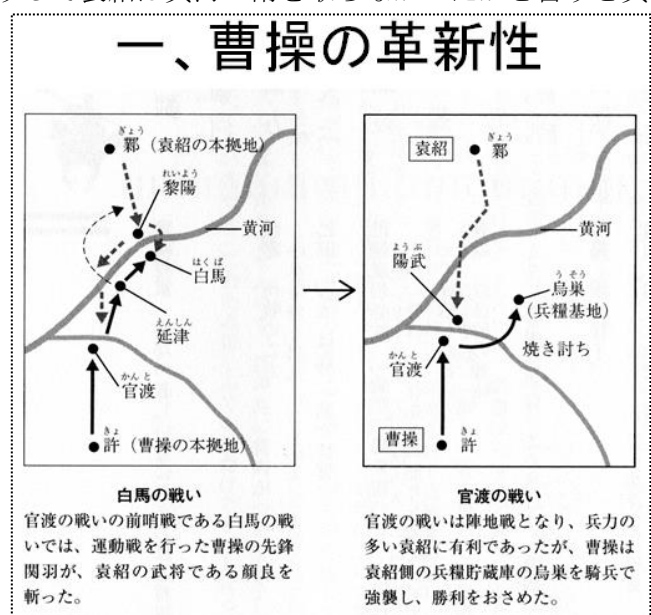
この時代中国の何処を取ると有利であったのでしょうか。長江の流域はまだ人が少なく、中心は河北と言われる地域で黄河の北の方の地域です。三国時代の始まりの頃に黄河の南で黄巾の乱が始まりました。戦略的に何処が有利か、黄河の北です。その場所を最も力を持っている勢力が取れる訳であり、有利な所は、河北四州（冀州・幽州・青州・并州）です。冀州では弩と言う強い弓を使える冀州強弩と呼ばれる首都防衛部隊を持つ事が出来ました。三国時代初期強かった董卓にも充分対抗出来、さらに并州には匈奴が住んでいる幽州には幽州突騎と呼ばれる烏桓を中心とした異民族の切り札の騎兵がいました。一番強い所、豊かだった所を袁紹が支配する訳です。正に一強状態で漢の後は袁紹が統一すると思われていたのです。

その中で曹操は黄河の南を領土としました。どうして袁紹は黄河の南を取らなかったかと言うと黄巾の乱で荒れ果てていたからです。曹操は官渡の戦い兵力差 10 倍と言われる戦いでこの兵力差を跳ね除けて破って行く訳です。具体的には白馬、官渡の戦いの2回に渡る戦いでありましたが、孫子の兵法の基本道理に戦った戦いが白馬の戦いです。孫子の兵法では 10 : 1 の兵力差があったら正面から戦ってはではなく、動き回る運動戦で曹操は戦いました。官渡に出て延津と言う渡し場に出て行き川を渡ったふりをして戻ってきて白馬に急行し、曹操のその動きに大軍の袁紹は動きについて行かず白馬の戦いで大敗をする、その戦いが前哨戦です。

当然、袁紹にも有能な孫子の兵法を知る軍師がいます。兵力が大きい時の戦いは陣地戦で戦うとされています。続く官渡の戦いでは曹操はかなり追い詰められて行くのですが、最終的には曹操は鳥巣を騎兵で強襲して官渡の戦いに勝ちをおさめるのです。

## 2) 曹操の3つの基盤

戦い方ではなく、何故、曹操が勝ったのか。それは、曹操が作りあげた3つの基盤があったからだと考えています。何故、曹操は黄河の南、黄巾の乱で荒れ果て所、黄巾と言う賊が沢山いる所に敢えてそこに曹操は出たのか。農民たちは何故反乱を起こしているのか、それは漢と言う支配が行き詰って食べられなくなっていたからで、反乱の中心には太平道と言う宗教がありました。曹操が学んでいた儒教からすると太平道と言う宗教は道教と同じなのですが、呪いもする下級で下劣な馬鹿にすべき宗教で、相手にしないと言うのが普通だったのです、しかし曹操は黄巾と激しく戦って負けて行き



### 曹操の3つの基盤

- ・青州兵—「反乱民を受け入れる」  
青州黄巾を受入れ、自らの軍隊に編入。
- ・屯田制—「兵から民へ」  
軍屯～兵糧を確保するため、駐屯地で軍隊が行う  
民屯～一般の農民に土地を与えて、租と調を税として徴収→隋唐の均田制へ発展。
- ・献帝擁立  
正統性回復の切り札～自らは即位できず。

しかし、何故か三国志を読んでもみるといつの間にか勝っていて、曹操が青州の 100 万の黄巾を降伏させたと書いてある。どうして曹操が勝ったのでしょうか。陳寿は曹操の味方をして書くのできちんと説明してくれていません。裴松之の注を読むと、黄巾側からは降伏要求書までが出ている、しかし結果として勝利しました。その後、降伏した黄

巾の人達はやがて青州兵と呼ばれる様になっており、曹操は自分の軍隊に青州兵を丸ごと入れていません。普通負けた軍隊は、ばらばらにするのが当たり前です。

呂布が戦った時に、相手が青州黄巾と解ったので騎兵で攻め、その戦いは青州兵が負けました。その事を曹操の軍隊が壊滅したと書いてあり、青州兵を呂布が見た時に青州兵と解る塊を持っていたのです。塊を持っていたと言う事は集団を維持していた訳で、その集団は信仰によって結びついた集団です。曹操が彼らの信仰を認めたその代わりに自分に仕える事を求めました。青州兵が負けたと言う事が曹操軍の壊滅と言われるのは、青州兵が曹操軍の主力であったと言う事です。

曹操は敗戦の中から自分に降伏を要求した連中を丸ごと飲み込んで、丸ごと受け入れて自分の主力軍にして来た事が解ります、青州兵が持っていたノウハウ彼らは農民でした。そのノウハウを活かしたのが、民屯を行った曹操の屯田制です。

一般の農民に土地を与えて租と調を取るという租庸調とは、日本が真似をした隋唐の税制です、租は漢からですが、調を布で取ったこの取り方は曹操が始めたものです、これが隋唐入ると均田制になりさらに日本に入ると班田収授法になる訳です。

「漢」最後の皇帝である献帝を迎えて自らの正統性の中心に据え、さらに宗教反乱軍がいる荒れ果てた土地は、普通の考えでは統治出来ません。その反乱軍を宗教ともに自分の軍に入れて軍事的基盤にした上で、土地が荒れ果てていて、農民が逃げていたのも、その土地を農民に与えそして税を取る事が出来た訳です。水利施設を整え、種籾を貸し牛も貸して耕せて税金を取る、この様な意図、政策が明確に存在すると言う事が曹操を一強に押し上げて行ったと考えられると思います。

### 3) 新たなる「一強」化

曹操が新しい一強になった時、そうした時代を超えた先進的なやり方が受け入れられたかは別の問題です。どの様な事かと言いますと、例えば漢は儒教によって支えられている、漢は孔子が予言して孔子にお蔭で出来た国家だと儒教は教える宗教でした。キリスト教も同じでローマ帝国はキリストが予言して出来た国だと言っていた訳です。同じような事を言って宗教は国に媚びへつらい保護を受けていました。その学問しかしていない、つまり儒教しかしていない人々にとって、儒教を打倒しようとする太平道を受け入れ、それを受け入れて自分の基盤にして行く、そして漢の最後の皇帝を擁立しているが決して尊重はしていない。その様な変革が正しいのでしょうか。既に仏教が中国に入って来ていた儒教に仏教で対抗する、太平道は道教を作って行くので道教を国の宗教にする等の選択肢がありました。

北魏と言う国家では道教を国教にしていますし、隋と言う国家では仏教を国教にしていました。日本でも遣隋使を派遣して仏教での支配の仕方を真似して国分寺、国分尼寺を置き支配をしますが結局は僧が力を持ってしまいます。儒教と言うものに対抗して仏教とか道教を使っても曹操の権威を遥かに超えてしまうのでなかなか君主権が立たない。そうした中で曹操はどうしたか、文学でそれに対抗して行く訳です、曹操の文学で一番有名なもので短歌行と言うもので三国志演義では赤壁の戦いの前に歌ったとされているが、いつ作られたかは良く解らないとされています。

#### [短歌行]

對酒當歌 人生幾何（酒に対しては当に歌うべし、人生幾何ぞ）譬如朝露 去日苦多（譬ば朝露の如し、去りし日は苦だ多し） 慨當以慷 憂思難忘（慨きて当に以て慷すべし、憂思は忘れ難し） 何以解憂 唯有杜康（何を以て憂いを解かん、唯だ杜康 有るのみ）

呦呦鹿鳴 食野之苹（呦呦と鹿鳴き、野の苹を食す）我有嘉賓 鼓瑟吹笙（我に嘉賓有らば、瑟を鼓し笙を吹かん） -----

山不厭高 海不厭深（山は高きを厭はず、海は深きを厭はず）周公吐哺 天下歸心（周公 哺を吐きて、天下心を歸せり）

杜康は酒造りの神、酒そのものです、さあ酒を飲もうと言う歌ではなく、起承転結、漢詩は最後の結が一番大事です「周公吐哺 天下歸心」周公は儒教が理想とする人です。哺は口の中でクチャクチャと食べているもの、それを吐いて、人材が来ている周公旦は直ちに食事を止めて会う。入浴中



髪を洗っていても止めて会い人材を登用した、それだけ周公旦が人材を求めたと言う詩を詠んだのです。

曹操が人材を求めているのがこの詩から解ります。何故か。当時の知識人が儒教を学んでいたからです。ここに鹿鳴という言葉があります、明治の知識人は基本的に漢文、漢詩が出来たので外国人を呼ぶ館に鹿鳴館と言う名前を付けた訳です、鹿鳴と言う詩が儒教の經典の詩経にあります、この詩を見ればこれは詩経だと言う事が解ります。

つまり、全く新しい文化を始めても誰もついて来てくれません。儒教の中で自分が一番やりたい文学、詩経と言うものを踏まえて文学に志、自分の考え方に近いものを染み込ませて行く様な事をやり、人事にも取り入れて人材の登用に活用して行ったのが曹操です。それまで儒教によって人材の登用をしていたがこれからは文学でやるというのは、具体的には唐の時代にやった科挙です、何故、杜甫とか李白が多く漢詩を作ったのでしょうか。漢詩の試験である進士科が科挙の一番上の試験だからです、文学によって志を知って行くのだと言う官僚登用制度はこの後の唐に時代に実現します。

曹操がやった屯田制が均田制と言う形で実現して行くのは唐の時代です。新しく調と言う税金制度を作って行きましたが、それが上手く運用されるのは唐代の租庸調です。人事制度として文学、詩で登用をする事を始めて、上手く行くのも唐代です。早すぎる、改革をして行く人を一般の人は理解出来ません。一般の人が理解するのは現状です、現状を超えたところに改革はある訳で、その改革を解る人々がどれだけいるのかよって改革者の幸せは変わって行くと思います。

曹操には郭嘉と言う曹操が一番愛した若者がいるのですが、郭嘉には曹操が何をしたいのか見えていたはずだと思います、一番具体的に支えていた荀彧は曹操について行けない、漢を滅ぼす事を諫めます。結局どうなったかといえば、曹操は荀彧を殺してしまう。改革者、先覚者は孤独である事が多いのですが、荀彧の後継者が陳羣、陳羣の後継者が司馬懿です。魏という国を滅ぼして行った司馬炎の祖父です。曹操に政策を拒否する人々の中で魏そのものが滅びてしまうのです。魏は滅びますが300年後、正確には400年後ですが曹操の政策が隋唐帝国の政策として隋唐だけではなく日本を含めて東アジア全体の国家システムと言うものに反映して行く、そう言う先進性を曹操は持っていた訳です、その先進性があればこそ、袁紹と言う物凄い名門の一強を打倒して行く事が可能でした。

孫子の兵法に多くの方が注釈をつけられています我々が孫子を読む時は『孫子』魏武注と言う曹操の注で読んでいます、何故曹操の注で読むのか、圧倒的に解りやすく迫力があるからです。

例えば『孫子』本文に、「彼我の兵力差が十倍以上であれば、城攻めの様な包囲戦を行う事が出来る」と孫子は言っています、曹操はどう言う解釈しているかといえば、「十倍という兵力差で敵を包囲するという原則は、敵味方の将軍の智能や勇猛さが同等で、将兵の士気・兵器の技術・武器の性能などがほぼ互角の場合である。それらが優勢な時には、十倍もの兵力差は不要である。私（曹操）はたった二倍の兵力で下邳城を包囲し、呂布を生け捕りにした」俄然説得力が違ってきます。

或いは曹操は儒教に対して徹底的に反対したかったのです。儒教が一番根底に置くのは親孝行の孝です。親孝行は何によって表現するのか、巨大な墓を作り多くの埋蔵品を入れるその様な事をする親孝行が見えます。しかし巨大な墓に多くの埋蔵品を入れた事もみんなが見ているので、当然の事ながら墓は暴かれ死体は棄てられ財宝は盗まれていきます。曹操はその様な見栄に我慢が出来なかったので大きな墓は作るな、金

銀財宝を入れるのは止めろと命令をしました。

曹操の墓が出て来ています「西高穴2号墓」と言うもので、発見された左側の墓は使われていません。何故、使われていないか考古学者には解らないのですが、私達は文献学者なので文献的に使われない事を解明し、中国の学会に発表して本物の曹操の墓だと言う事が次第に



浸透して来ました。

詳細は未定ですが 19 年度に予定をしています、上野「東京博物館」で曹操を中心とした「三国志展」を今準備しています、その墓からは写真の様なものが出てきました。金銀財宝が入っていたので偽物説もあったのですが、一応王様ですから普段着ている服にこの程度のボタンは付けている訳でその内この様な曹操の墓が見られるかも知れません。

## 2. 諸葛亮の戦略

### 1) 三顧の礼

諸葛亮は曹操より生まれが遅いので、既に曹操と言うものが一強として存在していました。諸葛亮に日本人が長い間情を寄せてきたのは諸葛亮が病に倒れて死んで行くことでしょう。日本人は判官鼻屑ですから。その判官鼻屑と言うものが諸葛亮の人気を支えていた訳ですが、しかし最近の若者は強い人が良い様で若干人気は下がり気味の様な感じがします。

劉備、関羽、張飛の 3 人が桃園で義を結んだ義兄弟になったのは三国志演義のフィクションです、それは事実ではありませんが、遺跡があります。三顧堂 (写真)

3 人はここで義兄弟になったと言う場所が残っています。歴史書の『三国志』の方にも劉備、関羽、張飛の間は「恩は兄弟の如し」と言う評価がされています。劉備は強く、腕が膝に届くまであり、耳が非常に大きく自分の耳を見る事が出来たと言う人で、傭兵隊長としての能力は非常に高く次々に戦っていくのですが、結局根拠地と言うものが持てないのです。何故かと言うと戦略がないからです。彼らは社会階層が低く、劉備と張飛は現在の北京の北側辺りに居た馬商人の用心棒でした。関羽は解県と言う塩が採れる所で塩商人の用心棒でした。



清水次郎長は東海道の輸送を牛耳って力を持った訳で、同じく当時物を運ぶ人達は盗賊にとって一番美味しい人達でした、当然誰かに護って貰わないと商売が出来なかった訳です、用心棒はその集団と一緒に動いており彼らの武力はその頃から培われていた。

日本には江戸時代、朱子学がありますが、士農工商、商人を一番下に置くのが儒教の基本です。その商人の用心棒ということは、社会的地位の低さが解ると思います、従って自分達の集団が拠点を持って行く為に、どうしても知識人を呼ばなければならなかった、その為に劉備は三度、諸葛亮の草廬を訪れて行く訳です。

### 2) 隆中对

劉備に対して諸葛亮が出したものが「隆中对」と呼ばれる天下統一策です。この当時、曹操は中原地方をその支配下に治めており、まだ小国ですが呉が長江流域に居て、劉備は荊州辺りに居た劉表と言う人の単なる用心棒、客将と言う名目で傭兵隊長として雇われています。

圧倒的な力を持っている一強と言われる曹操にどう対抗して行くのかを諸葛亮は説明して行く訳です、それが普通「天下三分の計」と言われています。

孫権と同盟を結ぶ、荊州を基盤として益州を獲る益州から長安と洛陽を攻める、それによって魏を滅ぼす事が出来るという「天下三分の計」は、天下三分を目的とする計略で手段です。諸葛亮は取り敢えず天下を三分してその後魏を滅ぼそうとしました。後の事は言ってはいませんが、魏を滅ぼした後のことについて孫権に、魏を滅ぼした後はどちらが天下を取るか決めるだけだと鄧芝と言う使者に言わせていますので、諸葛亮は当然魏を滅ぼして呉を滅ぼし中国を統一する、すなわち漢を復興する事を考えていたので諸葛亮の所謂「天下三分の計」は「天下統一策」なのです。

この策に基づいて同盟を組んで行くのですが、同盟は利害が一致しないと組めません。呉の中にも諸葛亮と取り敢えず同じ考え方持つ人がいました。魯肅と言う人です、魯肅の計は明確な天下三分の計です。魯肅は呉に仕えていましたが、ここでの自立は難しく、曹操に対抗すべき第三極を作り出さなければならないと考えました。第三極を作り出す事が出来たら、漢の時代では 9 対 3 対 1 ですから

蜀と呉が組んでも 9 対 4 です。三分しても安定しないのではないかと思います、この時代は寒く、今から平均気温 3℃位寒い、万里長城が南下した状態で北方民族が南に降りてきます。この時期多くの方が南方に降りて来ています。漢の時代と違い南方の生産力が高まっていた。その事が諸葛亮、魯肅二人の政策の後押しをしていたのです。諸葛亮、魯肅には、明確なビジョンがあります。取り敢えず天下三分をして行く時迄は協力出来る、結果、「赤壁の戦い」で曹操を破る事が出来たと思います。

### 3) 赤壁の戦い

劉備は新野におり、諸葛亮は柴桑で孫権と同盟関係を結び戦う事となりました。既に曹操は新野から入って来ていて、いきなり不意打ちを受けた劉備は本来は軍事拠点だった江陵に行きたかったのですが、当陽（長坂と呼ぶ事が多い）で劉備が曹操に追いつかれます。三国志演義では趙雲が劉備の息子劉禪を守った戦い。この長坂の戦いの後、別に行動していた関羽の水軍が迎えに来て夏口で合流、曹操は江陵に、ここから夏口、柴桑を狙う状況となりました。江陵で水軍を手に入れた曹操は赤壁の対岸の烏林に陣を敷く事になる。烏林と赤壁で両軍が向かい合って赤壁の戦となる。

赤壁が何処かは良く解らないのですが、何カ所か存在します。その中で赤壁と書かれた場所があり、その場所は明代に作られたテーマパークです、明代に三国志演義が流行りましたので「赤壁観光」が流行ったらしく、山の中腹に諸葛亮が風を呼んだと言う拝風台と言う遺跡を造り、ここには住んでいなかったと思われる龐統庵も作ったり、そこに赤壁と書かれた文字は周瑜が書いたと言う怪しい伝説があります。

周瑜はここで戦った事があり、うかうかと曹操は招き入れられてしまいました。周瑜が戦い易かった所で戦った事が敗因の一つで、曹操も戦う時に迷ったのだと思います。「孫子の兵法」は、何を一番尊んでいるのか、日本人は勘違いして「100 戦 100 勝危うからず」等の言葉を喜びますが、孫子は、100 戦 100 勝は全く勧めていない。100 戦したら 100 勝するが結果、国はボロボロになってしまいます。戦争をすると言う事は国がボロボロになる事と完全にイコールなので絶対戦争をしてはいけない。万が一やるのであれば、「100 戦 100 勝危うからず」。勝たなければならないほど戦争は危険なのだと言っており、戦わなくて降伏させる事が重要で、間と言いますがスパイを沢山入れて内報者を募る事が行われた。

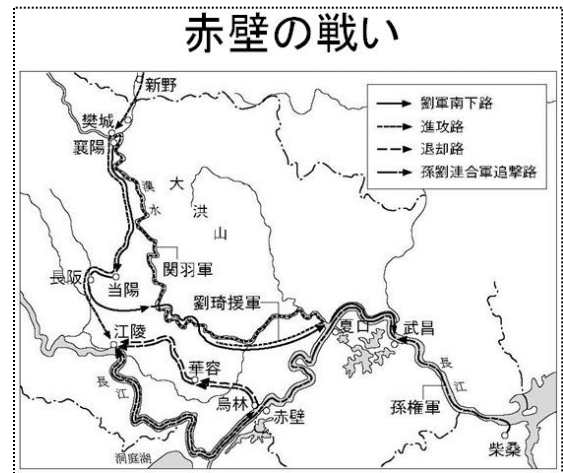
圧倒的に戦力差もあり曹操としては抵抗してくるとは思いませんでした。何故かと言うと孫子には「火責め」が一番損害が大きく絶対気を付けなければいけないと書いてあります。さらに 12 月は戦ってはならない時期だとも言っています。12 月に火責めで負けてしまう、それだけ孫子とは違う戦いをしているので、曹操は戦う積りはなく同盟も出来ているとは考えていなかったのではないかと思います。

諸葛亮は天下三分が目的ではなかった、天下統一を目指して行く訳で劉備が亡くなった後「出師の表」を掲げて戦いに行きます。

#### 【出師の表】

先帝（劉備）は始められた事業（漢の復興）がまだ半分にも達していない中道で（1）崩殂（ほうそ）されました。いま天下は三分し、益州は疲弊しております。これは誠に危急存亡の（2）秋（とき）です。それでも陛下のお側を守る臣下が宮中の内で警戒を怠らず、忠義の志を持つ臣下が外で粉骨碎身しているのは、先帝の格別の恩顧を追慕し、これを陛下にお返ししようと考えているためです。

（ですから陛下は）かならずお耳を開き、先帝の遺された徳を輝かし、志士の気持ちを広げるべきです。決してみだりに自分を卑下して、誤った喩えを引き、道義を失い、忠言・諫言の道を閉ざしてはなりません。宮中と 丞相府はともに一体ですから、賞罰褒貶に、食い違いがあってはなりません。もし悪事をなし法律（蜀科）を犯しあるいは忠善を行う者があれば、かならず担当官庁に下げ渡してそ





の刑罰恩賞を判定させ、陛下の公平な裁定を明らかにすべきです。私情にひかれて、内（宮中）外（丞相府）で法律（の運用）に相違を生じさせてはなりません。……

これだけだと劉禪にあれこれと指示するだけ、煩い感じですが「出師の表」が名文として好まれてきたのは、諸葛亮が教え諭す文章だけではなく次からの文章です。情緒的な自分を振り返っている所が高い評価の理由な訳です。

臣はもともと無官の身で、自ら南陽で晴耕雨読の生活をし、乱世において生命を全うするのがせいぜいで、諸侯に名声が届くことなど願っておりませんでした。しかし、先帝は臣の卑しきことを厭わず、みずから身を屈して、三たび臣を草廬に顧みられ、臣に当世の情勢をお尋ねになりました。これによって感激し、先帝のもとで奔走することを承知いたしました。そののち（長坂の戦いに）大敗を喫し、任務を敗戦の中で受けて、危難の最中に命令を奉じて（呉との同盟に）尽力し、いままで二十一年が経過しました。

先帝は臣の慎み深いことを認められ、崩御されるにあたり臣に国家の大事をまかされました。ご命令を受けてより、日夜憂悶し、委託されたことへの功績をあげず、先帝のご明哲を傷つけることを恐れています。そのため五月に瀘水を渡り、不毛の地（である南中）にも入りました。いま南方はすでに平定され、軍の装備もすでに充足しましたので、三軍を励まし率いて、北に向かって中原の地を平定するべきであります。願わくは愚鈍の才をつくし、凶悪な（魏の）ものどもをうち払い、漢室を復興し、旧都（洛陽）に帰りたいたいと思います。これこそ臣が先帝のご恩に応え、陛下に忠義を尽くすために果たさねばならぬ職責なのです……

「出師の表」の眼目はこの文章です。何で自分が戦いに行くのか「先帝のご恩に応え、陛下に忠義を尽くすため」この文章が中国を代表する「忠」の文章として読み継がれて来た理由がここにある訳です。

……陛下もまた必ず自ら考え、善き道を探ろうとし、正しい言葉を受け入れて、深く先帝のご遺言に沿うようにご努力ください。臣は大恩を受け感激にたえません。いま遠く離れようとするに当たり、表を前にして涙が流れ、申し上げる言葉を知りません」と。

(1) 崩殂（ほうそ）の殂は堯という人が死んだ時にだけ使う文字であって、漢は堯の子孫だと言っています。堯の後継者である事を崩殂と言う言葉を使う事によって、劉備が漢の後継者だった事を明確に示しています。(2) 秋（とき）と言う字を使い、一番重要な収穫の時期である事を示しています。

諸葛亮は「出師の表」を出してから5回に渡って、演義だと6回、魏との戦いに行き敗れて行きます。一番の敗因は蜀の栈道です、この写真は蜀の栈道の復元です。実はわたし、9月に五丈原に行ったばかりなのです。ここは今、山をくり抜いてトンネルが多いのですが、車に乗って4時間程で長安



蜀の栈道

から五丈原行けます。昔は垂直の岩盤に穴をあけて丸太を差し込んでその上に縦の丸太を立て、板を敷き、栈橋と言う字の栈の字、その様なものが栈道と言われるものです。この栈道を使って10万単位の軍隊の食料補給を行う、栈道が油をかけて焼かれる事もあり、補給、輸送が非常な困難を極めるのです。

諸葛亮も曹操と同じように屯田をやるのですが、軍屯です、曹操の様な時を超えた斬新さが諸葛亮にあった訳でなく、むしろ諸葛亮は保守的な政治家でありますので、漢の復興を目指し漢の制度を守り続けようとした訳です。内政的にかなり努力はするの

ですが、結局食料の輸送が続かない事です。

成都の武侯祠に、現在も漢昭烈廟というのは劉備の廟もあるのですが、諸葛亮を祀った地区の武侯祠の方が人気が高く大きくなった諸葛亮が鎮座しています。

## おわりに

本日は一強に対抗した2つの事例の話をして頂きました、1つは袁紹と言う圧倒的に生まれが良い四代に渡って対して宰相を出した家に対して曹操がどのように対抗して行ったのか。曹操は徹底的な改革、先進的であって当時の人々にどこまで理解されたのかについては疑問が残りますが、曹操が基本を作った魏は西晋に滅ぼされて行く事になります。

ローマ帝国は丁度この頃分裂しています、気温が3°C下がっているのは全地球規模の事でゲルマン民族の移動もこの理由です。ローマ帝国は分裂してその後二度と統一される事が無く、イギリス、フランス、ドイツ等の国に分かれて行きました。EU全部合わせても中国一国の方が領土も広いし国民も多い、むしろ中国が一国である方が珍しいのです。どうして中国は一国なのかと考えなければならぬ問題で分裂するとすれば漢が滅亡した時、古代帝国が潰れた時近代の主権国家レベルまで分裂する、それが中世の普通の在り方だと思います。

隋唐帝国が出来た時、気温が3°C高くなっています、北方民族が北に戻っています、その事もあり、隋唐と言うもので中国の統一を導いた政策が全部曹操だとは言えませんが、均田制とか租庸調の調の制度とか科挙の進士とか曹操がやろうとした改革の成果が、400年後の唐と言う国家で出来上がり結果として中国と言う国家が現在に至るまでの統一を保っている。改革の力、一人の力によって多弱から抜け出す事が出来るだろう、しかしこれはかなりいばらの道であり研鑽の道であると思います。

それに対して諸葛亮と魯肅が示したものは、戦略の基づく連合で一強を打倒する。野合ではない夫々にビジョンがあって、飽くまで天下統一と漢の復興を目指した諸葛亮と漢の復興は諦めて呉を存立させる為天下を三分しようとした魯肅とは目的は違うが、手段として曹操を破って取り敢えず天下を三分しようとするところまでは手が組めた訳です。その事によって曹操と言う一強を打倒して行った。その様な事が現在の政治に対する「三国志からの教訓」と見る事が出来るのでないかと思います。

## 【質 疑】

**Q:** 黄巾の乱が起きた頃、大きな乱でかなりの人が亡くなり、中国の人口が6000万人から500万人まで減少したと言われていて、この人口減少で孔子、孟子の時代からの中国人は絶滅し人種的に入れ替わった、それによって伝統とか文化が大きく変わったと思うのですがその点をお伺いします。

**A:** 黄巾の乱の前の漢の人口が解っていて全盛期5000万人位です。一時的には500万位に減りますが三国志の記録によりますと三国全体で1200万人位です。その差の3800万人が黄巾の乱で亡くなったと言うのは殆ど有り得ないと思います。第一次世界大戦でも1000万人死んでいません。黄巾の乱で3000万も4000万も人が死ぬ訳はありません。そもそも中国の人口はどう言うものかと言いますと、人口は国家が把握して税金が取れる人間の数です。漢と言う国家も権力が強い時と弱い時で人口は変わっている、把握出来る人口が変わるからです。把握出来ない人達は何処に行くか豪族とか貴族の大土地所有者がいますが、その中に入って行ってしまい、そこで生活するようになる。余りにも重い税金を掛けると人が減ってしまいます。黄巾の乱で漢の国家システムが崩壊してしまいますので、圧倒的に人口が減ってしまったのだと思います。曹操の屯田制の評価が高い所は豪族の支配下に入った人にも住んでいた地域には祖先の墓もある、その土地を整備し種籾も牛も貸す、税金は取るが戻って来る事を奨励した、それによって人口が回復して行く、例えば均田制と言う曹操の制度を継承した中国の北半分程度の領土の北魏では2500万人、隋になると5500万人となっている、その事は人口が増えたと言うよりも、そこ迄人口を把握出来たという事で、把握するしないは清朝迄一緒に清朝の人口は1億人位で推移するのですが、清の康熙帝の時に土地への税金だけにして、人頭税を止め地丁銀に変えたその途端に人口が4億人位増えています。戸籍に載る事は税金を取られる事なので逃げ様とする圧力は常にある。国家権力が強かった隋は、役人が一人一人の特徴を把握して戸籍を管理しました。さすがに日本はそこまで出来なかったのも、正倉院にある当時の戸籍には税金が掛からない女性の記



載が多い。戸籍は実人口とイコールではない中国は今でも戸籍がない人が結構多い。漢と言う国家が儒教だけの国家で、曹操はそれを打倒していく中で儒教だけが価値観でなく例えば黄巾の乱を起こした太平道とか五斗米道も保護します。仏教寺院の建設も黙認し文学も盛んにやって行く曹操は書道も出来ます、書家の名前が現われてくるのが後漢の末からです。囲碁とか双六とか曹操は万能人ですので様々なものが文化的な価値として取り入れられて行きます。結果としてこの後続く魏晉南北朝の時代では儒教以外の様々な学問、四学三教と言いますが、四学三教は儒学、史学、文学、老荘思想の玄学と儒教、仏教、道教です、例えば王羲之、彼は道教信者ですし儒教の知識もあり詩学にも秀でています、その様な様々な文化に通じている事が尊重される時代への転換期に三国志の時代は当たっていた。

**Q:** 中国では諸葛亮とか岳飛とか武将が神様に祀られている事が多いのが、その神様はどの様な宗教の神様か教えて下さい。

**A:** 武侯祠に祀られている諸葛亮は何の神様と言った時に仏教でもありませんし道教の神様でもありません。敢えて言えば儒教的な神様として歴代王権が祀る事が多い、神様として祀られる事が多いのは諸葛亮より関羽と言う人です。関羽の場合、最初は武力が尊重されて行きます。仏教寺院の伽藍神、日本では「天」バラモン教系の神様として仏を護る為の仏神として祀られています、関羽も最初は仏経を護る為の神様として祀られて行きます。その後、山西商人と言う塩を扱う商人が自分達の守護神として関羽を祀り、山西商人の関羽の宗教から道教の神様になって行きます、中華料理店等の民間で祀られている関羽は道教の神様です。基本、道教の神様の関羽は全てを叶えてくれる全能神ですが、元々は山西商人の守護神から出発していますので、弁財天と同じ財神です、その一方で関羽の武力を国家が利用する事はあります。宋と言う中国最弱の国家が異民族と戦う為に関羽に神様の称号を与えた、国家が祀る時は儒教の神様ですのでいろんな神様です、日本の様な定まりは案外ありません。

**Q:** 習近平は「三国志」から何を読んでいるか、先生の見方をお伺いしたい。

**A:** 習近平は国内的には一強ですが国際社会で中国が一強かと言うと別問題だと思います、今の段階ではアメリカの方が圧倒的に強いのではないかと、その中で習近平が掲げた政策は国学の重視です、儒教、中国の伝統的な価値観、文化で人権問題を西欧的な価値観と違う解決が出来るとして取り組み、アフリカへの支援を通して支持を広げ、国連の分担金も来年から世界2位です、色々な場で外交を展開して自らの独自の理念を作り上げていると言う点において、習近平も三国志同様の中国伝統の中に位置づけられると思います。

**Q:** 中国の歴史は分裂、統合を繰り返す歴史ですが地域も広く多民族で言語文化も違う、その中で、分裂から幾つかの国家に分かれて行かなかった理由をお伺いしたい。

**A:** 分裂する遠心力がある方が普通だと思います、言語、民族も沢山あって分裂をして行く方向性を持っている。中国はいつの時代でもそうだと思います。「大一統」と言うのですが日本流では統一を尊ぶ「春秋公羊伝」にある言葉です。習近平も大一統を掲げる訳です。その事が中国の伝統で、統一されている事が重要であると国家の側で中央集権的に出すと言う理念が、二千年三千年続いて来た国家である。その為に何が必要なのか、権力むしろ権威、権威の分配が必要なのだと思います。中央で持っている力を地方に分けて、どの様に分けると皆が中央に向くのか考えさせて行く事が権力者にとって最も重要だと思いますが、その中で漢字を用いていると言う事は大きなもので中国語は表意文字なので文字は変わりません。例えばドイツかフランスに向けて一週間ばかり滞在すると言葉の変化に気づきません。何故、ドイツ語、フランス語と別れるかと言うとスペリングが変わってしまい違う言語だと思ってしまうため、その事は明確に民族が違うと言う意識に繋がって行くと思います。それに対して漢字は広東語と北京語とは読み方が違うが漢字で書いてある以上漢字で読める訳です。その様な統一に向けたシステムを幾つか持っていると思います。今は共産主義イデオロギーを使えるでしょうし、昔は儒教と言うものを使っていた、儒教は自ら自立をして行く事ではなく臣下として皇帝を支えて行く事を最も尊重して行く訳で臣下である事を儒教で学んだ人達に科挙を通じて中央に若きつけて行くその様な力を働かせ続けてきた歴史だろうと思います。分裂に向う力と統一に向かう力がぐくぐくある感じではなく、分かれて行く力を中央から抑え込むと言うのが中国のイメージだと思います。

ています。

**Q:** 曹操は戦略性、孫権は信、劉備は情、諸葛亮は情報、知識と夫々特性があると思います、中国人が好きなのは曹操であって日本人は諸葛亮だと言われますが、どう分類したら良いでしょうか。

**A:** 曹操と諸葛亮を智で囲ってしまうのですが、曹操の智は凄味がある、周りの人が理解出来ないその様な怖さが有るのではないかと思います、今の中国は立ち止まっていたら踏まれる様な社会です。その中で新しい時代を改革して行く革新して行くと言う点で曹操の評価は高いと思います、社会を変えて行った人達には歴代の中国でも曹操の評価は高く、毛沢東は、三国志を読んで一番評価していて、曹操の評価が中国で高まったのは毛沢東が評価したからと言われます。鄧小平からそうですが、貧富の差が開いてしまったので毛沢東の再人気は今起きている。その毛沢東が評価しているのでの側面も曹操への評価にプラスなっています。それに対して日本人の方は所詮、隣の国の話でもありますし、私自身は吉川英治の三国志を読んだ世代です。吉川英治は諸葛亮を中心に書いています。最初の頃はフェクションも入れていたが戦争中に書いていて連載を抱えていたので忙しくなったのか最後の頃の諸葛亮は湖南文山の「通俗三国志」の翻訳と吉川英治とほぼ一緒です。江戸時代に日本の伝統の中で諸葛亮が愛されて来たと言いますがこの事が日本の三国志の受容の有り方なのかと思っています。

**Q:** 「三国志」から読める邪馬台国、倭国を具体的に教えて頂きたい。

**A:** 西晋の歴史家の陳寿が書いた「三国志」の中に魏志倭人伝と言う部分があります。二十四史と言う史記から始まる中国の正史の中で異民族の事を書いてあって日本人の事が一番多いのは「三国志」です。中国から見ると国境を接するベトナム、チベット、モンゴルとか匈奴等の重要な所が他にありながら日本の事を一番詳しく書いている。なんでその様な事を書くのか。西晋と言う国家は司馬懿と言う諸葛亮と五丈原で戦った人の孫の司馬炎が初代皇帝の国です。「三国志」には司馬懿を良く書かなければいけない事があったのだらうと思います。では司馬懿は何をしたのか、蜀の諸葛亮の進攻に対抗する為出陣し破った、その功績を書き、諸葛亮を物凄く強く物凄い男にして司馬懿が蜀を破ったと書いている。もう一つ遼東の公孫淵の反乱を鎮定した事ですが、公孫淵は簡単に鎮圧出来てしまったので諸葛亮と同じ様に書く事は出来なかった。そこで邪馬台国が親魏倭王と言う称号を貰っている事に注目すべきです。この称号はもう一つ北インドにあったクシャーナ朝が親魏大月氏王との称号を貰っている、同レベルです。蜀の諸葛亮はシルクロードの国々を味方にしたとされており、魏の曹真の所に来たクシャーナ朝からの使者を曹真は洛陽に連れて親魏大月氏王と言う称号を与えました。その事によって魏の後方からの脅威を防ぐ事が出来たのです。曹真の子息が曹爽で司馬懿の政敵です。その曹真が大月氏国を連れて来たから、蜀が魏に勝てなかったと言う大きな功績を揚げています。邪馬台国にその親魏大月氏王と同じ親魏倭王称号が与えられているのは、司馬懿の功績として公孫淵の反乱を鎮定する事によって、呉の東方活動を抑え、海の彼方にある大きな国（倭国）を味方につけ朝貢が出来るようにしたと陳寿は書きたいからでしょう。大月氏国は1万6000キロ以上の遠い国、遠国からの朝貢ほど皇帝の徳は高いとされ、その事で司馬懿の功績は大きくなる訳です、従って「邪馬台国」は距離は魏から1万6000キロ以上遠く東南になければならない、その事が三国志から読める「邪馬台国」です。

## 渡邊義浩先生のプロフィール

### 【経歴】

一九六二年、東京都生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科史学専攻修了。

文学博士。北海道教育大学助教授、大東文化大学教授を経て、現在、早稲田大学文学学術院教授。専攻は中国古代思想史。古代中国の思想史を追究する一方で、「三国志」についての一般向け解説、啓蒙も精力的に行い、映画「レッドクリフ」日本語版監修、DVD「三国志 Three Kingdoms」日本語版監修などを手がける。今年の五月には、NHK 100分 de 名著の講師をつとめた。

## 【主な著書】

著書に、『後漢国家の支配と儒教』（雄山閣出版）、『三国政権の構造と「名士」』（汲古書院）、『後漢における「儒教国家」の成立』（汲古書院）、『西晋「儒教国家」と貴族制』（汲古書院）、『「古典中国」における文学と儒教』（汲古書院）、『三国志よりみた邪馬台国』（汲古書院）、『「三国志」の政治と思想』（講談社選書メチエ）、『儒教と中国 「二千年の正統思想」の起源』（講談社選書メチエ）、『三国志の女性たち』（山川出版社）、『三国志の舞台』（山川出版社）、『関羽 神になった「三国志」の英雄』（筑摩選書）、『王莽 改革者の孤独』（大修館書店）、『三国志 演義から正史、そして史実へ』（中公新書）、『魏志倭人伝を読む』（中公新書）、『三国志 英雄たちと文学』（人文書院）、『全譯後漢書』（全十九巻、汲古書院）などがある。